



イヴァ・ハラディスは倉重光則の紹介により、日本で初個展を開催する。ステップスギャラリーオーナーの吉岡まさみのブログによると、イヴァは「チェコ生れのチェコ人ですが、アメリカに亡命。現在はサンフランシスコに住んでいて、ロサンゼルスを中心に発表をしています」。

イヴァは《Amatory》21点、《瞑想》6点、《仏陀》2点（12.7×12.7cm/紙に鉛筆、アクリル）、ネックレス4点、イヤリング2点を出品した。画廊内に《Amatory》とアクセサリー、事務所に《瞑想》《仏陀》を円状に展示した。小さな作品であっても、十分に存在感を示した。

日本における美術とデザインの棲み分けは本当に凄まじく、デザインの美術館が存在しないどころか、ジュエリーを教える大学院はない。しかし欧米と中国では共存し、ジュエリーデザイナーの展覧会を美術館が開催している。

この意味において、イヴァにとってジュエリーとアクリル画は対等の表現であり、それに基づいて、我々も両作品を等価に受け止め、作品の真意を考えていかななくてはならないだろう。

イヴァのジュエリーとアクリル画、共に共通する事項は、上記の図版を例にとると、モチーフ（下着、素材）と装飾

（波、形）が一体化しながらも、作品中に収まることなく、外界と対峙し、拮抗して新しい世界を形成しようとしている点にある。つまり作品だけで完結しているのではなく、時代と共存することによって成立するようになっているのではないかと私は考える。

アクリル画をじっくり見詰めると、同じような作品はこれまで見たことがないことに気が付く。「作品」というよりも「イメージ」か。アールヌーボー、アールデコという美術とデザインの動向にも見当たらない。中世、古代にも思いを巡らせても思いつかない。

それどころかファッション、マガジン、イラスト、ポルノ、広告のどこにも類似する作品は見当たらない。つまりイヴァの描く目的とは、純粋な現代の美術のあり方そのものであり、それ以上でもそれ以下でもない。

無限のフォルムを持ち得るジュエリーは、高級品としての金額と素材、身に付けることを前提とする用途と重量を含むサイズという枠から逃れることができないのだが、2016年3月にドイツでみたジュエリーデザイナーの展覧会は、何と全くデザインと関係のない、アーティステックなドロ잉であった。イヴァの作品をもっと知りたい。

